日本教育新聞
新聞　平成18年（2006年）10月2日（月曜日）　（4）

福井豪雨 被災した子のケアに奔走

福井県養護教諭研究会「サポート隊」の活動

心と体の両面で

継続して見守る体制つくる

災害による心のダメージは大きい。そこに年齢の差がないとはいえ、成長過程にある子どもには大きな傷となる。今年の夏、鹿児島県で開かれた全国養護教諭研究大会で、福井県養護教諭研究会（会長＝杉川美栄子・福井県立大野東高校養護教諭）の定永眞由美養護教諭（福井県立春江工業高等学校）は2年前の福井豪雨の際、被災した子どもの心のケアに取り組んだ「養護教諭サポート隊」の活動を紹介した。「雨音を聞くと怖がる」「悲観的な話ばかりする」子どもたちに心と体の両面で支援し、復興を支えた。サポート隊の活動を紹介する。

平成16年7月に福井県を襲った豪雨。「養護教諭として何かできないか」

復旧作業が進む中、県内の養護教諭334人で構成する県養護教諭研究会の役員らは話し合った。「災害で命の危険を感じたり、大切なものを失ったことによる心のダメージは大きい。早期に対応しないとPTSDなども懸念される」。被災から11日。同研究会は子どもの心のケアを目的とするサポート隊を組織し会員に参加を呼び掛けた。

活動は7月から8月の17日間。延べ108人の会員が、福井市、美山町、今立町内の6つの小学校で活動した。

夏休みであったが、大人は復旧作業に追われていたため、学校で児童を預かる学童保育が開始されていた。児童の中には、「落ち着きがない」「だっこをせがみ甘える」など心的な影響が見られた。

サポート隊はそうした児童を中心に本の読み聞かせや折り紙をしたり、被災体験を話す子どもには耳を傾けるなどして寄り添った。健康観察も行い、夜眠れない児童やぜんそくなどの病気が悪化した児童は、医者やカウンセラーなどに引き継いだ。

◇

同研究会はサポート隊の活動を組織的に行うため、県教委と連携を図った。県はサポート隊の存在を各学校に通知。サポート隊は県を通じ要請のあった学校に派遣された。

「大切なことは子どもの様子を継続して観察すること」。役員の1人だった定永養護教諭は話す。

しかし、毎日同じメンバーを派遣するのは難しい。そこで子どもの様子を「引き継ぎノート」に記録。次の隊員や被災校の教員に分かるよう、1日の活動や気になった点などを詳しくメモし継続して見守る体制を整えた。

災害時には家庭訪問などを行い子どもの現状を把握しなければならないが、被災校の養護教諭は学童保育の子どもへの対応で家庭訪問に同行できない状況にあった。こうした問題も隊員が入ることで可能となり、専門的なアドバイスができた。

このほか、同研究会では、子どもの心の状態を調べるためのチェックリストや災害後に起こる子どもの変化と対応策を記した保健便りを作成し、データを被災校に提供した。対応に追われる現場ですぐに活用でき好評だったという。

定永養護教諭は「子どもの心と体の両面から支援できる養護教諭の専門性を生かせた活動だった」と当時を振り返る。

研究会は昨年、サポート隊の活動を検証し活動や運営方法、派遣のシステムなどを整理し報告書にまとめた。これを各都道府県や全国の養護教諭研究会などに配布した。

大雨の被害に遭った長野県の研究会も福井の例を参考に活動したなど、各地から感謝の手紙が寄せられ、活動が全国に広まりつつあるという。

杉川会長は「自然災害はどこにでも起こる。多くの人に利用していただければ」と話している。

報告書の問い合わせ＝福井県養護教諭研究会☎0779・66・4626